



会津の仔犬

：

南海部

覚悟

【義経】



長閑な小春日和の青空の下で、公園のベンチにまどろんでいると、サッカーボールと思しき球体が、豊かな弧を描いて落ちてきます。

最初は小さかった球体が、段々大きくなって・・・そのうち視界の一割ほどを占めるようになると、回転して風を斬る振動と一緒に、しゃくれた皺顔の表情が現れ、その黒い両眼と視線が合いました。

球体に四肢が伸び、末端の肉球が私の頬を掠め、大きな破裂音がして廻りの空気が震えました。気がつくやうに、粉々になったベンチの横に、元気な仔犬がはしゃいでいました・・・・・・・・。

猛暑に火照った季節を、朝からの雨が冷まし続け、初秋の涼やかな大気が、大地を覆う層となって、会津盆地の底に潜り込んでいきます。

かねてから訪れたかった飯盛山さざえ堂と、大内宿を廻った帰り道、新潟で借りたレンタカーの中での出来事です。

「雨で足元がびしょびしょだわ、本当にかっかり、せっかくの会津若松なのに・・・・・・・・。」助手席の妻が、タオルで靴を拭いながら嘆いています、久し振りの夫婦旅には残念な天気でした。

雨に煙る田園の国道の、対向する歩道の上を、仔犬を連れた小柄な婦人が歩いてきます。元気なパグ犬で、リードを一杯に引いて全身ずぶ濡れになってはしゃいでいます。

後方からトレーラーが水飛沫を巻き上げ、それをかわそうと屈み込んだ婦人の手から、リードが離れました――。

車道に飛び出した仔犬は、トレーラーのバンパーの端に引っ掛けられ、そのまま私たちの方向に飛ばされます。

深く寝たフロントウィンドウに弾かれて高く上がった犬は、バックミラーの中でまるでサッカーボールのように、アスファルトの上を何度も弾み、最後に後続の車に思いっきり弾かれて、視界から消えてしまいました。

「――あ！田んぼの中に落ちちゃった!!」

妻が悲鳴を上げます――。

慌てて車を路肩に止めて後ろを振り返ると、さっきの婦人が車道を横切って駆けてきます。

――驚いたことに、婦人めがけて全身泥だらけの仔犬が走りよってきました。

タオルを持った妻が、ドアを開けて駆け寄ります――。

「どうやら、大丈夫みたい。骨も折れていないし、脈も正常だし・・・・・・・・。」

タオルに包まれた犬をあやしなうながら、後ろの席で婦人が呟きました。仔犬に似て童顔ですが、それでも40代そこそこの品の良さを感じます。

「獣医に診せなくて大丈夫ですか？あんなに何度も弾んで……。」

妻が心配そうに覗き込みます。

「大丈夫でしょうこの子なら……それに私も獣医ですから。」

仔犬は、もう何事も無かったように尾を振って、飼い主にじゃれついています。

「何処まで行かれるんですか？この雨の中……。」

フロントウィンドウに異常が無いのを確かめて、車をスタートさせました。

「今日中に仙台まで帰らないといけないんですが、この雨でJRが運休で……。」

「郡山までで良ければお送りしましょう——新幹線は動いているんでしょ？」

「助かります、でもご迷惑じゃ……。」

「この車も、郡山で返す予定ですから、ワンちゃんに痛い目させたお詫びです。えーっと名前は？」

「——義経です。」

【ダイラタンシー】



「でもどうして、あれだけ跳ね飛ばされてなんとも無いんですか？まるで、スーパーボールじゃないですか、義経君……。」

雨に霞む猪苗代湖の水面を眺めながら、妻が当然の疑問を切り出しました。

道路の北方には、深い雨雲に包まれて磐梯山の裾野が拡がり、山塊の上半身を重々しい黒雲が覆い隠して只ならぬ緊迫感

を漂わせています。

「不思議でしょ……。」

仔犬の背中を優しく撫でながら、暗い空を見つめていた婦人が呟きました。

「学会で発表も終わったことだし……。」

ちょっと考えた後――。

「――秘密にしておく理由もありません、ご説明しますわ。」

そういつて、手にしたバッグの中からペットボトルを取り出して、妻に差し出しました。

「思いっきり握りつぶしてみてください、中の水にちょっと仕掛けがあるんですが……。」

妻が云われたとおりにすると――。

「あれ！氷？――違うわよねえ。」

「――どうした？」

「握ると固まるのよ、でも手を放すと元の水に戻っちゃう――。」

私も、信号停車を利用して試してみました。

「ダイラタンシー効果といいます。」

義経の黒い目を見ながら婦人が続けます。

「片栗粉を溶いた水面を、人が走るのをテレビで見たことはありません？液体に力を加えると、一瞬固体になる現象です。地震のときの液状化は、これと全く逆の現象ですわ。」

「液体と微粒子との間で起きる物理現象なんですけど、水単体でもそのような性質があることを、10年前に私たちが発見しました――言い遅れましたが、私、仙台の大学で分子生物学の研究をしています。」

驚く夫婦を尻目に、女性学者は続けます。

「そもそも、人間がどうして交通事故や落下事故で、命を落とすと思います？」

「そりゃ、骨が粉碎されたり、内臓が破裂したりして……。」

「人の体の7割方が水で出来ているからです。水は弾性体と違い衝撃を受けた後、決して元の形に戻らないものですから……。」

「そこで、私たちの研究室はこの10年、水のこのダイラタンシー効果だけを活性化しても、それ以外の物理的、化学的性質に変化がないことを実証してきました。」

義経が低い声で鳴き始めます、バッグからカップを取り出すと、さっきのペットボトルの水を注ぎました。

「――義経は、私のペットなのですが、同時に実験動物でもあるんです。この子が生まれたときから、この水を飲ませています。」

「ともかく、この子の体内の水は、衝撃を受けた瞬間、天然ゴムの弾性と鋼鉄の粘りを獲得します、そして直ぐに元に戻ります。だから、さっき程度の事故では、掠り傷も負わない筈なんです。」

長い沈黙が、犬の水を啜る音を際立てます・・・・・・・・・・。

【飛行機事故】



郡山駅で女性学者を降ろし、レンタカーを返却してホテルにチェックインしたのは、雨の街にネオンが冴える時刻でした。

「——どう思う？あの学者さんの話。」

窓際のソファに腰を下ろしながら、妻に尋ねました。

「どうって？」

「人間に応用するつもりなんだろうか？」

「だから言ってたじゃない、まだずっと先の話だけど、人に利用できれば五千人余りの年間交通事故死者を、限りなくゼロに近づけられるって、そうなるよう努力しているって……。」

「何処から、資金が出ているんだろう？」

「——大学からに決まってるじゃない、何考えてるの？」

「まず利用価値が考えられるのは、一番に軍事だ、敵に撃たれても死なない兵士——。」

「男は、すぐそんな風に考えるのね……。」

呆れ返った顔が、こっちに振り向きました。

「——大体、気持ち悪いとは思わないか？トラックに跳ね飛ばされた人間が、もくもく起き上がって平気な顔するんだぜ、まるでゾンビ映画じゃないか。」

「でも、それで命が助かるんなら、それで良いじゃない。」

「人はね、合理的に死が了解される状況に於いては、やはり素直に死ぬべきだと思うんだ……車に何度も轢かれたり、超高層ビルから滑落したり、機関銃で蜂の巣にされた人間が、それでも生きてるといふのは、何か違うと思う。」

「そんな経験はしたくないけど……それでも私は生きていたいと思うわ。」



帰宅した一週間後のことです、大内宿で撮った雨の中の蛙の可愛さに見惚れていると、朝刊を手にした妻が大慌てで部屋に入ってきました。

「ねえ！これあの学者さんじゃない！」

パグ犬を抱いた、見覚えのある顔写真が載っています。

アメリカシカゴで航空機事故……強風の中着陸に失敗……

・唯一の生存者……日本人女性科学者とその愛犬。

目撃者によると、大破した機体から放り出された2名は、滑走路をサッカーボールのように100m以上転がり、フェンスに激突して20mも弾かれたが、擦り傷ひとつなかった……助けられた女性科学者は、ティファニーで購入したばかりのアクセサリーが破損したことを、ひどく嘆いていた……。

その後数年間、女性学者とは年賀状を交わす程度の交流しかありませんでしたが、震災の年、彼女の大学が発起した、震災孤児の学資支援義援金活動に参加した礼状を兼ね、近況を記した長め

の手紙が送られていました。

そしてその中に、将来の津波対策としての、とんでもない驚くべき可能性が記載されていたのです。

【女性学者の手紙】

この度は思いも掛けず、震災孤児の学資支援事業にご賛同頂き、本当にありがとうございます。主催します本学理事会を始め、当ラボのスタッフ一同、心より感謝申し上げます。当然のことではありますが、ご支援頂きました資金は、震災孤児の学資のみならず、日常生活費を含め有益に使用させていただきます。

(中略)

今回の震災は、本学に所属する複数のラボに多大な損傷を残しました。既にご承知とは思いますが、三陸海岸に実験拠点を設けていました本学潮流発電研究所のスタッフ2名が、津波の犠牲となりました。大学本部は仙台市西部の丘陵地にあり、併設されるサーバーセンターに被害が及びませんでしたので、彼らの研究論文、実験データ、観測データのバックアップが確保されたことはせめてもの救いです。

私たちのラボも松島湾の奥で、上下水等インフラの被災に長期間悩まされましたが、幸い津波の被害は免れることができました。

不思議なことに、東に口を開けた東北三県の入り江で、この松島湾だけが津波の被害を殆ど受けませんでした。

松島群島の存在がその理由だと云われていますが、私たちのラボは15年来この場所で研究を続け、その間ずっとこの下水を利用し続けているのです。

ひょっとすると津波災害に限りましては、今後私たちの研究で、被害を小さくさせることが出来るのではないかと考えております。

(中略)

それにつけても、お二人にお逢いした福島が、あのような災禍に現在も苛まれつつあることを、嘆かわしく思います。

今私の袂で、元気に飛び跳ねている義経と一緒に、今度は私どもが美しい浜通りを、ご案内できればと考えておりましたのに……。

長々と綴って参りましたが、この辺りで結ばせて頂きます。

本格的な夏に向け、暑さが徐々に増してまいります、お二人ともどうかお体ご自愛ください、有難うございました。

以上があ的女性学者からの、礼状です。

読み終わった妻が尋ねました、

「津波の被害を小さく出来るって……人があの水を飲んで、津波に襲われても死なない体にするってことかしら？」

「そうじゃないだろ、研究所の排水は15年間ずっと松島湾に流れていたんだ……彼女それが言いたいんだ。」

「流れていたらどうなるの？」

「松島湾の海水にダイラタンシー効果が起こったんだ、それで津波の被害が及ばなかった……

ダイラタンシーの海水が自然の防潮堤になったんだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・おわり。

会津の仔犬

<http://p.booklog.jp/book/80055>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80055>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80055>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ